

麦野 A

— 麦野 A 遺跡群第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第275集

1992

福岡市教育委員会

麦野 A

— 麦野 A 遺跡群第 4 次調査報告 —
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第275集



1992

福岡市教育委員会

遺跡調査番号	9116	遺跡略号	MGA4
調査地地番	博多区麦野4丁目14番23	分布地図番号	麦野12
開発面積	349m ²	調査対象面積	289m ²
調査期間	1991年7月9日～8月10日		

序

麦野A遺跡群は、福岡市の南部に位置し、これまでの3次にわたる調査で、中世・近世の集落跡が検出されている遺跡です。しかし、このあたりを含む福岡市博多区麦野の一帯は、早くから福岡市の市街地南郊の住宅地として、宅地化が進んできた地域であり、遺跡群の大部分が未調査のまま住宅の地下に埋もれてきました。最近になって、この地域にも建て替えや高層マンション化の波が及び、それに伴なって発掘調査の機会も増えてきました。本書は、共同住宅建設に先立って発掘調査を行った麦野A遺跡群第4次調査の成果を報告するものです。

本調査では、奈良時代の堅穴住居跡、中世の掘立柱建物跡、土塙墓などが検出されました。本書が市民の皆様の文化財に対する理解を深めていく上で広く活用されると共に、学術研究の分野でも貢献できれば幸いです。

発掘調査から資料整理までの費用負担、便宜にご協力をいただいた、水上一忠氏を始めとする方々に、心から謝意を表します。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

例　言・凡　例

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、福岡市博多区麦野4丁目14番23に関する発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は、大庭康時が行なった。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭および大庭智子が、遺物実測図は大庭が作成した。整図には大庭・井上涼子があたった。なお、遺構実測図中で用いられている方位は、磁北である。
4. 本書に使用した遺構写真・遺物写真は、大庭が作成した。
5. 本調査に関わる遺物および記録類の整理には、生垣綾子・国武真理子・瀬戸満寿江・萩尾朱美・古谷宏子・保利みや子があたった。
6. 本調査にかかわるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収藏管理・公開される予定である。

本文目次

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織と構成	1
3. 遺跡の立地と歴史的環境	2

第二章 発掘調査の記録 5

1. 発掘調査の概要と経過	5
2. 遺構と遺物	11
(1) 壺穴住居跡	11
1号壺穴住居跡	11
3号壺穴住居跡	13
5号壺穴住居跡	14
6号壺穴住居跡	16
8号壺穴住居跡	21
10号壺穴住居跡	25
12号壺穴住居跡	26
14号壺穴住居跡	30
16号壺穴住居跡	30
(2) 土塙	31
1号土塙	31
3号土塙	32
5号土塙	33
7号土塙	34
(3) 挖立柱建物跡	35
1号挖立柱建物跡	35
3号挖立柱建物跡	35

第三章まとめ 38

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1991年4月8日、渡邊順児氏より筑紫不動産を通じて、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対し、福岡市博多区麦野4丁目14番23に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地一帯は、福岡市中心部の南郊に位置し、早くから住宅地となってきたところである。しかし、開発が早かつたため高層建築物はほとんどなく、宅地の間に農地が残るなど、地形の変更が比較的小規模にとどまっている。また、申請地は、福岡市教育委員会が1971年に発行した『福岡市文化財分布地図(東部Ⅰ)』によって周知された麦野A遺跡群に含まれている。そこで、埋蔵文化財課は、1991年4月30日試掘調査を実施、遺構の存在を確認した。

その後、申請地は売却され、水上一忠氏を施主として共同住宅を建設するという計画がかたまり、新生不動産を窓口として協議にはいった。その結果、開発面積349m²の内、建物によって破壊される約289m²について発掘調査を実施し、記録保存をはかることとなった。

福岡市教育委員会埋蔵文化財課では、7月4日、地元町内会および周辺住民に対し発掘調査に関するビラを配布し了承を求め、7月9日発掘器材を搬入、7月10日より表土剥ぎを行ない、発掘調査に着手した。なお、実際に調査を実施した面積は、隣接地及び道路への養生等によつて、247.4m²である。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	水上一忠
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉
調査総括	埋蔵文化財課課長 折尾 学 同 第2係長 塩屋勝利
調査庶務	同 第1係 中山昭則
調査担当	同 第2係 大庭康時
調査作業	柴戸浩司 田川剛(福岡大学学生) 岩隈史郎 江越初代 大庭智子 金澤春雄 金子國雄 熊本義徳 権藤利雄 篠崎伝三郎 関加代子 関義種 曽根崎昭子 高浪信夫 萩尾朱美 村崎祐子 森垣隆視 森山恭助 森山タツエ 騰田栄 その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、水上一忠氏、新生不動産の御協力をいただいた。

3. 遺跡の立地と歴史的環境

麦野A遺跡群は、御笠川西岸の南北にのびた台地上にある。この台地は、その南端で、麦野B遺跡群・同C遺跡群・南八幡遺跡群などが立地する台地とつながり、全体として手を広げた形の台地を形作っている。これは中位段丘面であり、約7万年前の阿蘇火山のカルデラ形成期に噴出した火砕流（阿蘇IV火砕流）によって形成された面である。火砕流による堆積物は、大部分は白色粘土化した八女粘土層で、その直上には黄褐色軽石質火山灰（鳥栖ローム層）がおおっている。麦野A遺跡では、鳥栖ローム層が、構造検出の際の窓のいわゆる地山となっている。

周辺は、弥生時代には「奴国」の中心と目される地域で、重要な遺跡が集中している。とりわけ、縄文時代晩期の水田遺構と環溝集落で知られる板付遺跡、奴国王の墓とみられる須玖岡本遺跡は著名である。須玖岡本遺跡の乗る丘陵の周辺では、青銅器鋳造遺跡である須玖永田遺跡・須玖唐製遺跡、鉄器製作にかかる赤井手遺跡など、金属器の生産をも含めた総合的な大遺跡群の姿が浮び上りつつある。このように、御笠川西岸地域における弥生時代の生活は活発で、平野部に点在する低丘陵上には、必ずと言って良い程集落遺跡や埋葬遺跡が分布する。それにもかかわらず、麦野台地上の諸遺跡からは、今まで弥生時代の遺構は知られていない。この辺の事情の解明は今後の課題となるが、以下麦野台地上の既往の調査について略述する。

麦野A遺跡群では、過去3回の発掘調査がなされている。第1次調査と第2次調査とは、同一敷地内の一連の調査で、麦野下古賀遺跡として報告されたものである（福岡市報第107集、1984年）。15～16世紀の集落遺跡で、掘立柱建物跡・井戸・竪穴状土坑などが検出された。第3次調査では、近世の井戸・土塹を調査した他、奈良時代の遺物も出土している。第3次調査地点は削平が激しく、本来奈良時代の遺構が存在した可能性は考えられる。

麦野B遺跡群では、2次にわたる発掘調査を実施している。第1次調査は、麦野B遺跡群の立地する丘陵が谷部に落ち込んだ据部に位置する。7～8世紀の井戸、13世紀の井戸、近世の溝を検出したほか、調査範囲の大半は水田と考えられる（福岡市報第164集）。第2次調査では、7～8世紀の竪穴住居跡を調査している（福岡市年報Vol. 4）。

麦野C遺跡群では、未だ1例しか調査されていない。第1次調査では、8世紀中頃から後半の竪穴住居跡23軒を検出した。他に、旧石器時代の石刃・剥片が出土した（福岡市年報Vol. 4）。

南八幡遺跡群では、4次の発掘調査を実施している。第1次調査では、古墳時代の溝を調査した。第2次調査と第3次調査は隣接し、6世紀後半と8世紀の竪穴住居跡・土塹・掘立柱建物跡を調査した。地山のローム層中から黒曜石の剥片2点が出土し、旧石器時代のものと考えられる（福岡市報第128集、第181集）。第4次調査では、掘立柱建物跡を検出した。遺物が少なく、時期比定は困難だが、古代から中世にかかるものと考えられる（福岡市報第277集）。



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 麦野A遺跡群 A—第1次・第2次調査、B—第3次調査、C—第4次調査、2. 麦野B遺跡群 D—第1次調査、E—第2次調査、3. 麦野C遺跡群 F—第1次調査、4. 南八幡遺跡群 5. 仲島遺跡 6. 桜付遺跡 7. 須岡A遺跡
8. 須岡B遺跡 9. 井尻遺跡 10. 須玖唐製造跡 11. 須玖水田遺跡 12. 須玖向本遺跡

麦野遺跡群調査一覧

調査名	測量番号	所在地	調査面積	調査期間
麦野A第1次	8 2 3 2	博多区麦野1丁目28-56	420m ²	1982年9月21日～1982年10月31日
第2次	8 2 3 2	博多区麦野1丁目28-56	150m ²	1983年5月17日～1983年5月26日
第3次	8 3 3 7	博多区麦野5丁目24地	80m ²	1983年7月15日～1983年7月23日
第4次	9 1 1 6	博多区麦野4丁目14-23	247m ²	1991年7月10日～1991年8月10日
麦野B第1次	8 5 2 0	博多区龙野4丁目26-75	800m ²	1985年10月1日～1985年11月10日
第2次	8 9 0 4	博多区糸大町2丁目4	100m ²	1989年4月11日～1989年4月12日
麦野C第1次	8 9 4 9	博多区麦野6丁目11-4	633m ²	1989年10月11日～1989年11月18日

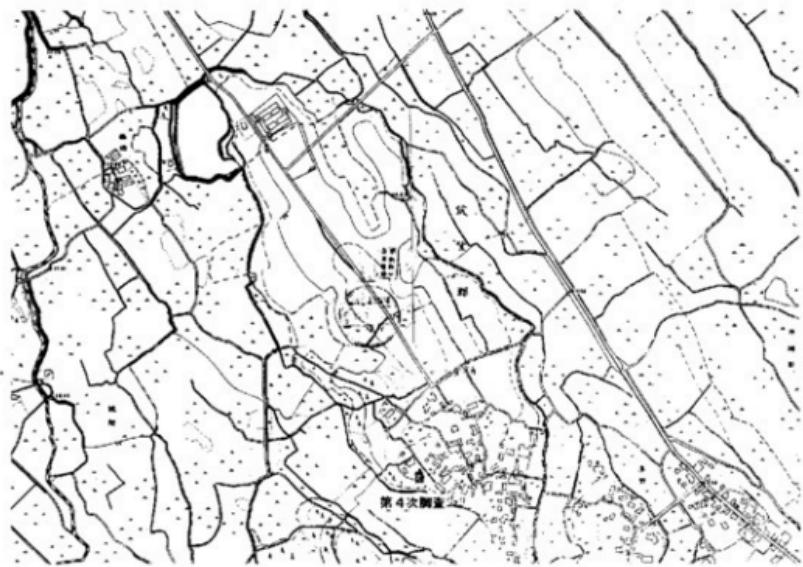


Fig. 2 調査地点周辺地形図（昭和10年頃、1/10,000）

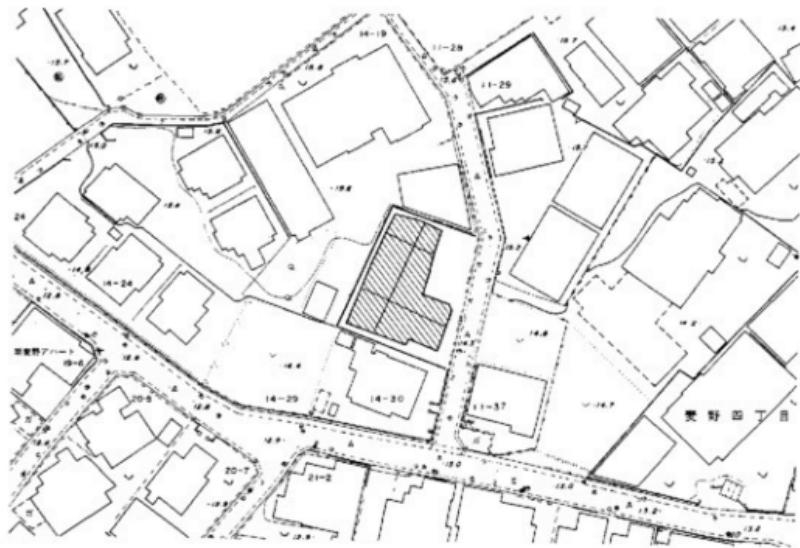


Fig. 3 調査地点位置図（1/1,000）

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

第4次調査は、申請地内に施土置き場を確保できなかったため、調査部分を南北で二分し、打って返して調査することとなった。調査は北側から着手し（1区）、終了後1区を埋めて南側（2区）の調査を行なった。

調査地点の現状は宅地で、表土上面は客土で平らにならされていて。しかし、周辺の現地形をみると、北側では隣接地との間に高低差ではなく平坦だが、南側では隣の宅地との間に約1mにも及ぶ落差があり、周囲の道路の傾斜からも調査地点が傾斜面上にあることが予想された。これは、宅地化以前の地図にも明瞭に表われている（Fig. 2）。すなわち、麦野A遺跡の立地する南北に長い台地には、西側から食い込む低地がいくつかみられるが、そのひとつの中低地に面した丘陵南斜面上にあたるのである。調査の結果検出した地山の傾斜は、北側にあたる1区では緩やかだが、2区の南半にいたって急激に傾きを強めており、調査地点が南斜面の落ち際の肩部付近に位置することがうかがわれる。そのため、1区では表土から地山面まで20cm前後しかなく、Fig. 9に見られる様に、表土をはがすとすぐに住居址の立ち上りが確認できるといった状況であった。それに対し、2区の南側では地山までの深さは80cmにも及び、表土下に大きく3層の堆積がみとめられた（Fig. 4-②・③・⑥）。この3層はほとんど遺物を含まず、無遺物層に近い。竪穴住居址などは、この内の最下層を切り込んで掘られている。ただし、その判別は容易ではなく、遺構検出は地山ローム面上で行なっている。

地山面上には、今回の開発による解体以前に建てられていた家屋による搅乱が、縦横に走っていた。また、解体に際してのパワーシャベルによる掘り取り孔が随所にみられ、遺構の失なわれている部分もあった。しかし、全体としてみれば、遺構の遺存状況は良好である。

遺構は、調査した段階で種類を問わず通し番号を付けた。ただし、個別の記録を取らなかつ

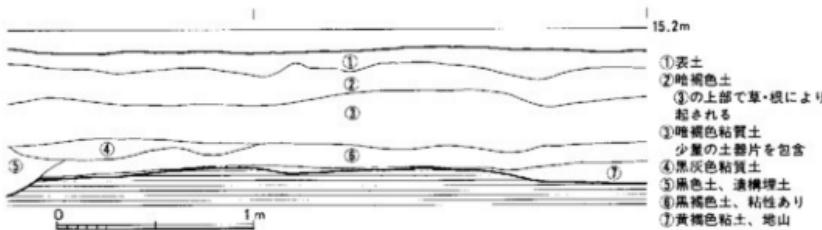


Fig. 4 土層実測図 (1/30)

た遺構、遺物が出土しなかった遺構については、番号を付けていない。遺物取り上げや、実測・写真撮影など、すべての記録類はこの番号毎に行なっている。その後、資料整理の過程で、調査結果にしたがって、遺構の種類別に呼称を改めた。その対照は、表1に示す通りである。

調査に際しては、調査区の形状にあわせて、2m単位の方眼を設定した。基準線は、磁北から約29度東偏する。遺構全体図の実測は、この方眼にあわせて、縮尺20分の1で行なった。個別の遺構実測にあたっては、それぞれ任意に基準軸を設定し、縮尺10分の1で実施した。調査区全体図および地形測量は、縮尺100分の1、等高線10cm間隔で平板測量した。

検出した遺構は、奈良時代の竪穴住居跡17軒、土塙6基、中世の土塙2基（内、1基は土塙墓）、柱穴多数、時期不明土塙2基である。中世とした柱穴の内には、奈良時代の土師器・須恵器片しか出土しないものもあるが、絶して小型で中世の柱穴と区別できない点から、中世の柱穴に含めた。なお、柱穴の配置から掘立柱建物跡4棟を復原しているが、さらに多數の掘立柱建物跡が存在したものと考えられる。

以上の成果を上げ、1991年8月10日埋め戻しを行ない、発掘調査を終了した。大まかな経過



Fig. 5 調査地点地形測量図 (1/200)



は、次の通りである。

- 7月9日 発掘器材搬入
10日 1区表土剥ぎ
11日 1区遺構検出開始
22日 1区全景写真撮影
25日 1区埋め戻し、2区表土剥ぎ
26日 2区遺構検出開始
29日 台風7号上陸、テント・トイレ破損
31日 台風被害復旧
8月7日 2区全景写真撮影
10日 2区埋め戻し、発掘器材撤収、
調査終了



Fig. 6 調査区全景 (1)…1区(南より) (2)…2区(東より)

表1 遺構番号対照表

番号	遺構名	番号	遺構名	番号	遺構名	番号	遺構名
001	柱穴	017	柱穴	033	12号竪穴住居跡	049	柱穴
002	柱穴	018	柱穴	034	柱穴	050	柱穴
003	1号土塙	019	柱穴	035	柱穴	051	=021
004	1号竪穴住居跡	020	5号土塙	036	土塙	052	柱穴
005	2号竪穴住居跡	021	6号竪穴住居跡	037	13号竪穴住居跡	053	土塙
006	2号土塙	022	7号竪穴住居跡	038	柱穴	054	柱穴
007	柱穴	023	8号竪穴住居跡	039	柱穴	055	柱穴
008	3号竪穴住居跡	024	023の一部	040	柱穴	056	柱穴
009	柱穴	025	柱穴	041	柱穴	057	柱穴(攪乱?)
010	3号土塙	026	柱穴	042	柱穴	058	8号土塙
011	4号竪穴住居跡	027	4号土塙	043	柱穴	059	14号竪穴住居跡
012	柱穴	028	柱穴	044	柱穴	060	15号竪穴住居跡
013	竪穴住居状遺構	029	6号土塙	045	柱穴	061	17号竪穴住居跡
014	5号竪穴住居跡	030	9号竪穴住居跡	046	土塙?		
015	柱穴	031	10号竪穴住居跡	047	7号土塙		
016	柱穴	032	11号竪穴住居跡	048	16号竪穴住居跡		



Fig. 7 調査に参加された方々

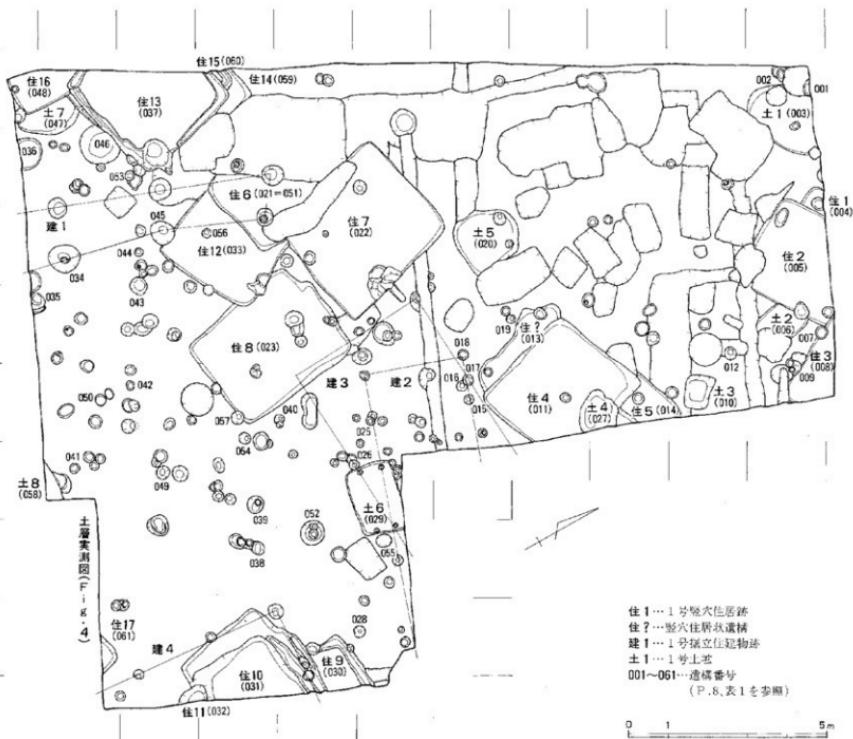


Fig. 8 造構全体図 (1/100)

2. 遺構と遺物

(1) 壇穴住居跡

1号壇穴住居跡 (Fig. 9・11)

調査区北東辺際から、2号壇穴住居跡に切られて検出した壇穴住居跡である。住居跡の西北隅を確認したにすぎない。

住居跡の床面は平坦で、貼り床はみられなかった。住居跡の壁は、10cm前後が残っていた。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれている。壁溝は認められない。

遺物は、須恵器の甕片が1点出土したにとどまる。



Fig. 9 1号住居跡断面

2号壇穴住居跡 (Fig. 10・11)

調査区北東辺付近で検出した壇穴住居跡である。南西壁の大半と南隅は、搅乱孔のため失われている。南東壁の一部は、2号土塙・3号壇穴住居跡に切られている。また、住居跡の北側は調査区外に出ており、東隅・北隅を確認することはできなかった。

住居跡は、短辺2.5m、長辺2.7m以上の長方形の平面を呈し、遺存した深さは約20cmをはかる。床面は平坦であるが、壁に近づくと丸味を持って若干上昇し、明瞭な角を有してほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は、掘られていない。貼り床も認められなかった。南隅付近の搅乱孔の隙で、白色粘土塊が2ヶ所残っていた。1ヶ所は、搅乱孔の壁内に立っていたが、もう1ヶ所は住居跡南西壁に密着しており、原位置をとどめたものと判断された。したがって、この原位置を留めた粘土を右袖の一部として、住居跡南隅近くの南西壁に窓が設けられたものと考えられる。なお、住居跡内に柱穴が3基見られるが、住居跡に伴なうものではなく、主柱穴は検出されなかった。

埋土中より、須恵器甕・甕、土師器甕・甕、木炭片が出土した。Fig. 10-1～3は須恵器の高台付甕である。1・2は、底部を欠く。甕部は、やや深めで、体部はゆるく外反する。1は、生焼けで、一見土師器を思わせる。3は底部片で、断面四角形の小さめの高台を貼りつける。体部は内外面とも横ナデ調整、内底部はナデ調整を施す。4・5は、土師器の甕である。器表は荒れていて、調整痕の残りは良くない。体部内面はヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部外面には全く調整痕は、残っていない。

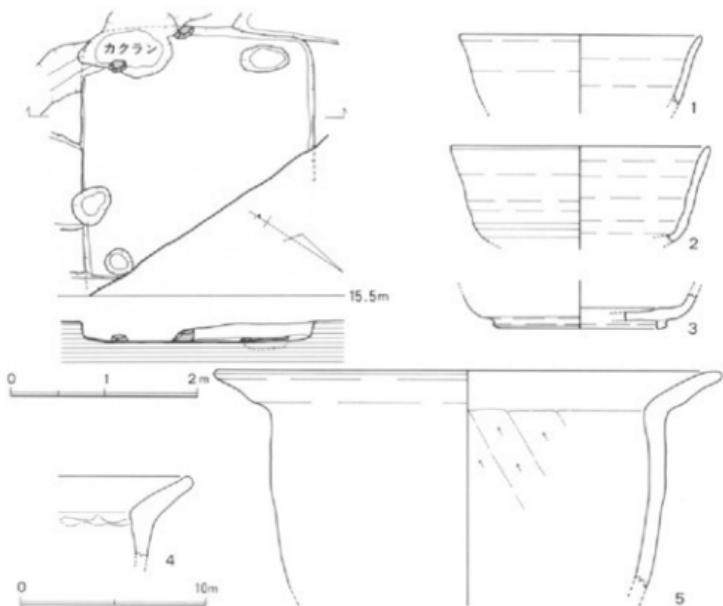


Fig. 10 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)・遺物実測図 (1/3)



Fig. 11 2号住居跡 (西より)

3号竪穴住居跡 (Fig. 12・13)

調査区東角で検出した住居跡である。大半は調査区外に出て、住居跡南側は、攪乱により破壊されているため、規模は不明である。深さ15cm前後をはかる。

須恵器片・土師器片が、少量出土した。Fig. 12-1に示したのは、須恵器の环である。

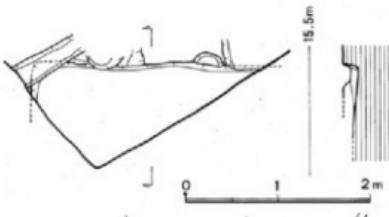


Fig. 12 3号竪穴住居跡実測図 (1/60) 遺物実測図 (1/3)



Fig. 13 3号竪穴住居跡 (西より)

4号竪穴住居跡 (Fig. 14~16)

調査区東辺で検出した、方形住居跡である。一边2.8~2.9m、深さ27cm前後をはかる。床面は、全体的には平らだが、細かい凹凸がみられる。貼り床は、認められない。床のほぼ中央に主柱穴がみられる。また、住居跡の北西側半分に、小柱穴が集中してみられる。その配置には、特に規則性はないが、主柱を避ける様に屈曲して分布している点から、住居跡に伴うものと判断できる。他に根拠はないが、この部分に床が設けられた可能性を考えたい。なお、壁際に設けられた小穴は、南北壁にも分布しており、壁体を支持したものと思われる。

出土遺物は、須恵器環・环蓋・壺片、土師器環・甕・瓶把手である。Fig. 16-1~7は須恵器である。1は蓋で、つまみを欠く。頂部は、平坦にヘラ削りされる。2は、環である。外底部はヘラ削りされ、内底部はナデ調整、体部は内外面とも横ナデ調整される。高台はつかない。4~7は高台付環である。8・9は土師器の高台付環である。器表は剥げ気味で、荒れている。

5号竪穴住居跡 (Fig. 15・16)

4号竪穴住居跡と重複して検出されたもので、検出段階の埋土の観察からは、両者の切り合ひ関係を判断することができなかった。調査区東辺にあらわれた住居跡断面の観察では、4号住居跡上に5号住居跡の断面を認められず、この点から4号住居跡が5号住居跡を切るものと思われる。

床面は平坦だが段差があり、ベッドを作出していた可能性がある。検出面からの深さは、上段で約6cm、下段で18cmをはかる。

須恵器蓋片、土師器壺片が出土している。



Fig. 14 4号竪穴住居跡出土須恵器

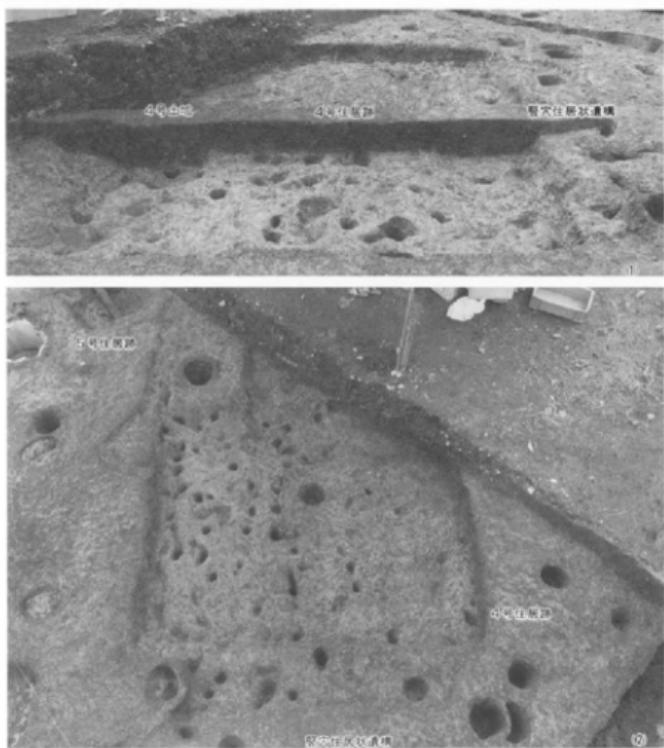


Fig. 15 4号竪穴住居跡・5号竪穴住居跡・竪穴住居状遺構 (1)…断面 (2)…全景 (西より)

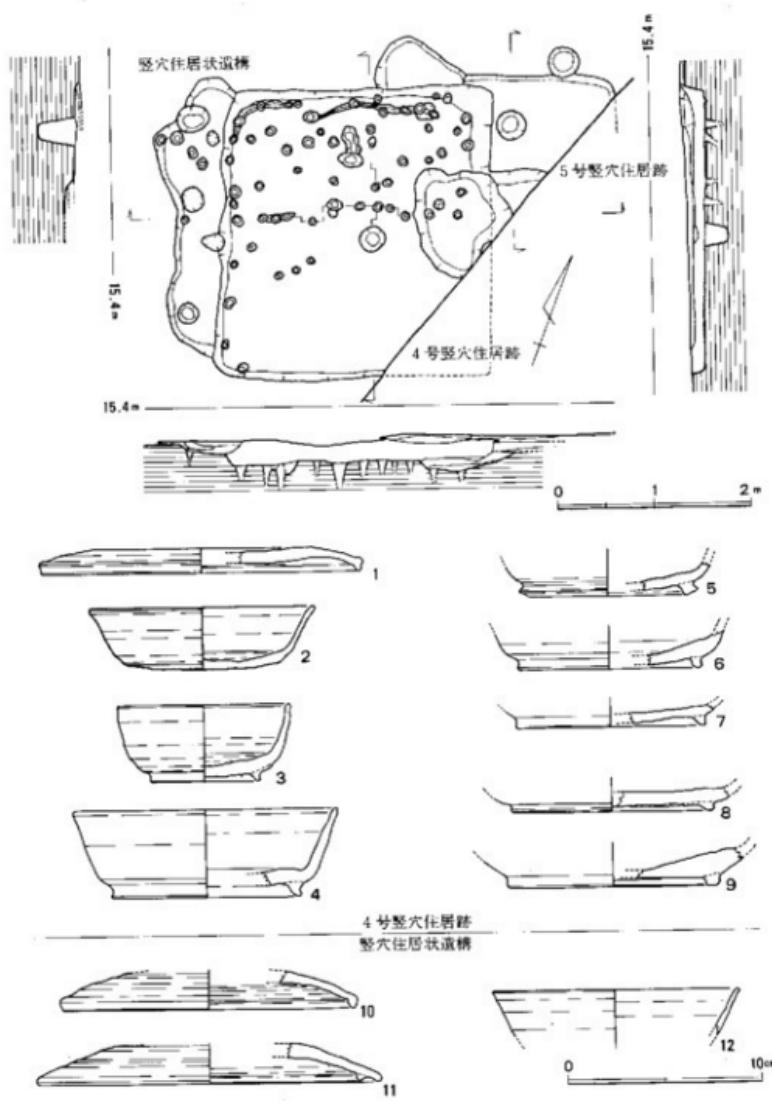


Fig. 16 4号竖穴住居跡・5号竖穴住居跡・竖穴住居状遺構実測図(1/60) 遺物実測図(1/3)

豎穴住居状遺構 (Fig. 15・16)

4号豎穴住居跡に切られて検出された遺構である。豎穴住居跡状の掘り込みであるが、平面的には出入りの多い不整形であり、豎穴住居跡とするには疑問がかかる。また、4号住居跡に付設されたベッドの可能性も考えたが、両遺構を横断して設けた土層観察用の畦をみると、明らかに4号住居跡に切られており (Fig. 15-(1))、4号住居跡に先行する遺構である。

須恵器壺・壺蓋、土師器小片が出土した。Fig. 16-10~12は、須恵器である。10・11は壺蓋で、比較的器高が高い。12は壺である。器肉が薄く、精品である。

6号豎穴住居跡 (Fig. 17・32)

調査区中央付近で検出された、方形住居跡である。北側と西側は、攪乱によって失なわれている。遺存する南辺は、約2.4m、深さ約12cmをはかる。主柱穴は検出されなかった。

7号豎穴住居跡 (Fig. 18~24)

調査区中央付近で検出された方形住居跡で、西壁の大半と南西隅を攪乱のために失なっている。長辺約3.5m、短辺約3.1m、深さ約55cmをはかる。床面は平坦で、主柱穴はみとめられない。貼り床は、為されていなかった。壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は、掘られていない。

東壁の中央からやや南に寄って、窓がつくられている。窓は、焚口を掘りくぼめ、その左右に白

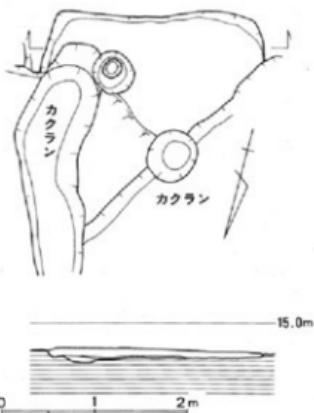


Fig. 17 6号豎穴住居跡実測図 (1/60)



Fig. 18 7号豎穴住居跡埋積状況 (西より)

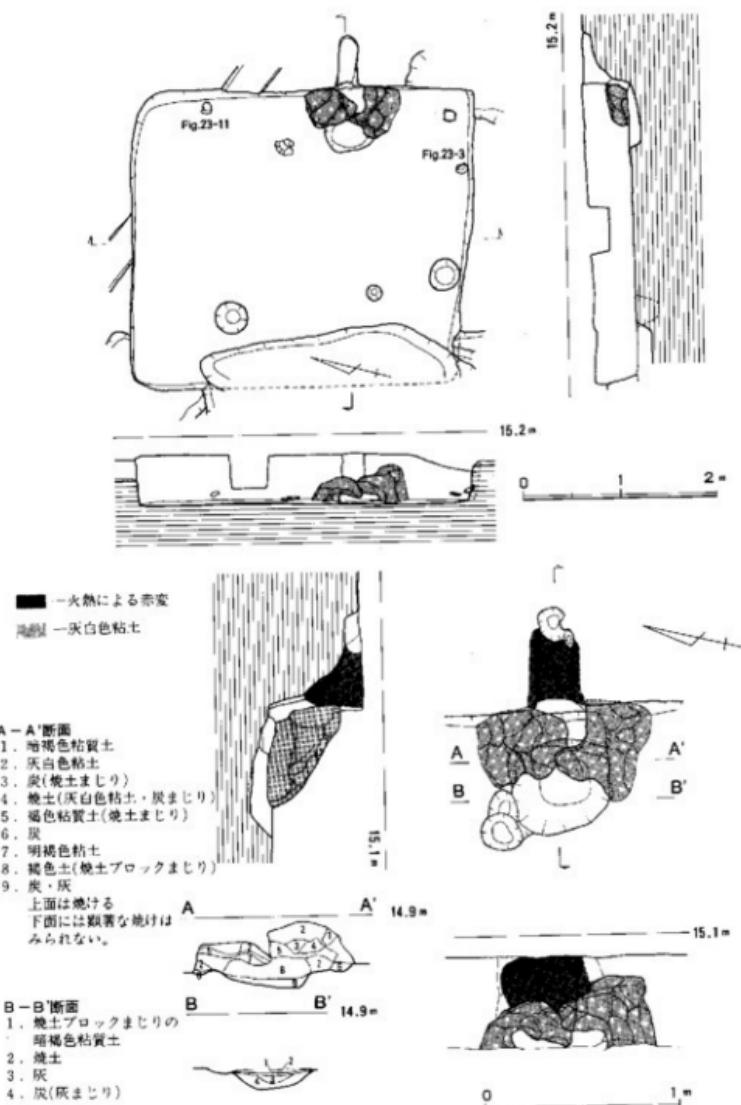


Fig. 19 7号竖穴住居跡実測図 (1/60)、壁実測図 (1/30)

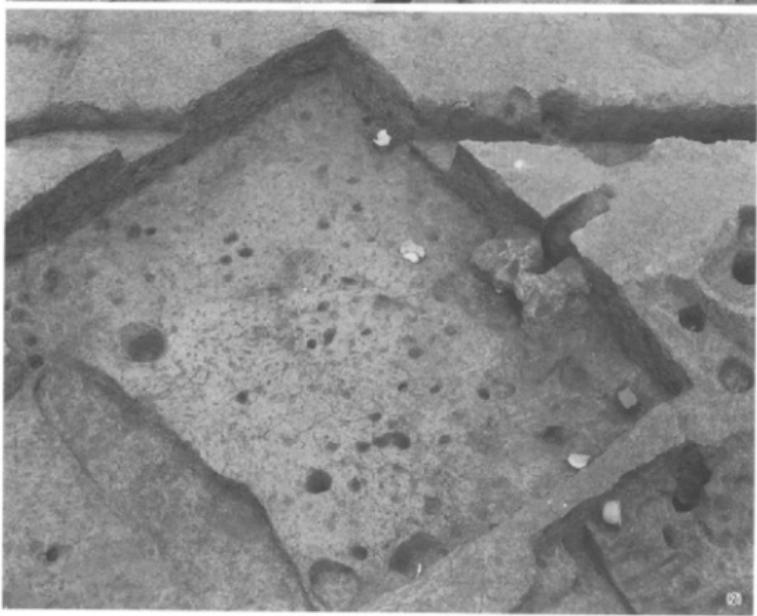


Fig. 20 7号堅穴住居跡

(1) 全景 (東より) (2) 遺物出土状況 (南より)

色粘土を置いたもので、煙道は、住居跡の背面に溝状に掘り込まれている。焚口の凹みには、うすく炭が堆積していた。白色粘土は、右袖はほぼ完存、左袖は上半が下に折れ曲がって検出された。本来は、右袖と対称に作られたものであろう。煙道は、壁面の中位より斜め上方に掘られたもので、先端は径18cm程の浅いビット状を呈する。竈の奥壁から煙道にかけては、火熱のため赤く焼き縮っている。この硬化赤変は、煙道の表面から3~4.5cm程地山内側に及んでおり、火熱の強さを物語っている。

出土遺物は、須恵器壺・壺蓋・土師器壺・壺蓋・焼等である。多くは埋土中からの出土であり、Fig. 23-3-11および土師器甕胴部破片が、床面から若干浮いて出土した。1~6は須恵器である。1は壺蓋の破片である。2~5は、高台付壺である。いずれも、比較的深い体部を持つ。3は、床面から若干浮いて出土したが、竈内に堆積した土中から出土した破片と、接合することができた。5は、7号住居跡の遺構検出時にその上面から出土したものである。2~4と比べて、高台の形状、貼付位置が異なり、7号住居跡に伴わない可能性が考えられる。6

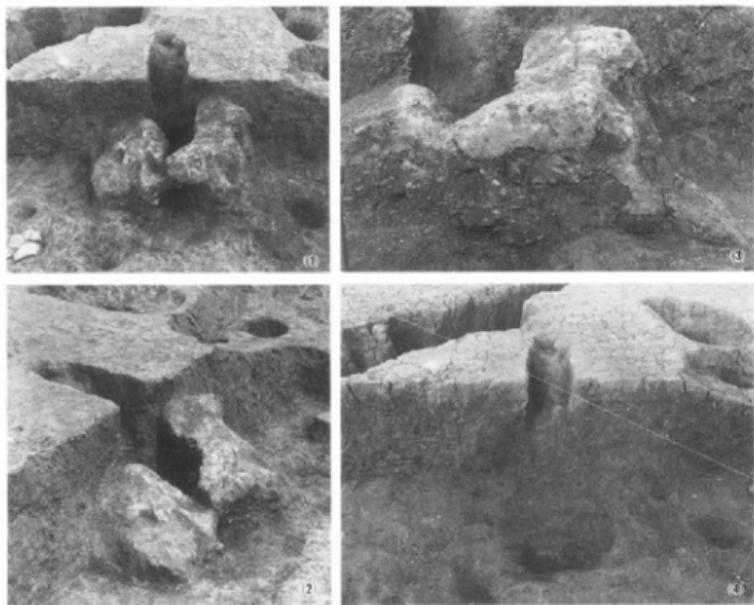


Fig. 21 7号竪穴住居跡竈

(1)・(2)…検出状況 (3)…竈袖粘土断面 (4)…袖粘土除去状況

は、壺の口縁である。7～12は、土師器である。7は片蓋で、内外面をヘラ磨き、口縁の折り返し部分を横ナデする。8は高台付皿である。器表剥落し、調整不明。9～12は甕である。体内部はヘラ削り、外面は縦刷毛調整し、口縁部は横ナデする。10は甕内埋土から、11は床上から(Fig. 19・20)、12は甕袖の粘土内から出土した。



Fig. 22 7号竪穴住居跡出土須恵器坏

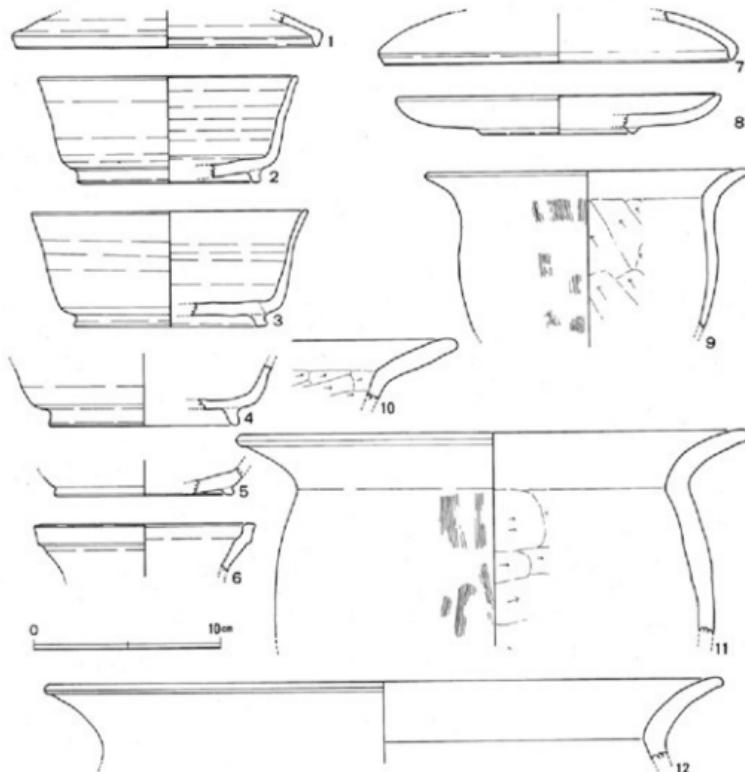


Fig. 23 7号竪穴住居跡遺物実測図 (1 / 3)

8号竪穴住居跡 (Fig. 24~26)

7号竪穴住居跡に接して検出した竪穴住居跡で、12号竪穴住居跡に切られている。3.3×2.7mの長方形を呈するが、北辺に約20cm程張り出しを設ける。これについては、竪穴住居跡同士の切り合いを想定して、埋土に縦横にトレンチを入れたが、切り合いに関係は認められず、單一の造構と判断した。床面はほぼ平らだが、北東側4分の1程の部分で、緩く凹んでいる。床面までの深さは約20cm、凹んだ箇所で約30cmをはかる。主柱穴は認められない。

北辺の壁際から床面にかけて、焼土塊がみとめられた。焼けて赤変した粘土を塊状に置いたものと思われ、窓にかかるものと考えられる。ただし、焚口・煙道等、窓の存在を直接に示すものは、確認できなかった。

出土遺物は、須恵器壺・壺蓋・甕片、土師器甕である。Fig. 25-1~3・6・8は、須恵器である。1~3は壺蓋、6・8は高台付壺である。4・5・7・9~12は、土師器である。4・5・7は高台付壺である。体部は内外面とも横ナデ調整する。9~12は、甕である。9は、住居跡北壁際に横転していたもので、完形品で出土した。体部内面はヘラ削り、外面は擦過調整、口

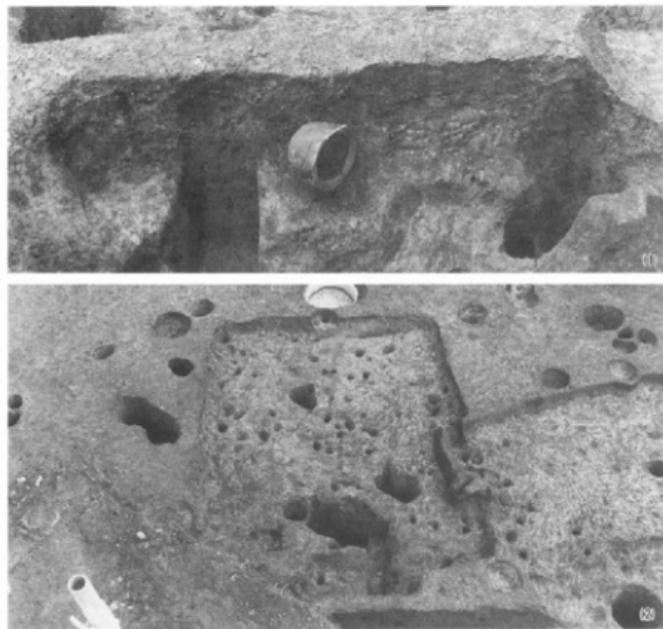


Fig. 24 8号竪穴住居跡 (1)…土師器甕出土状況 (2)…全景 (北より)

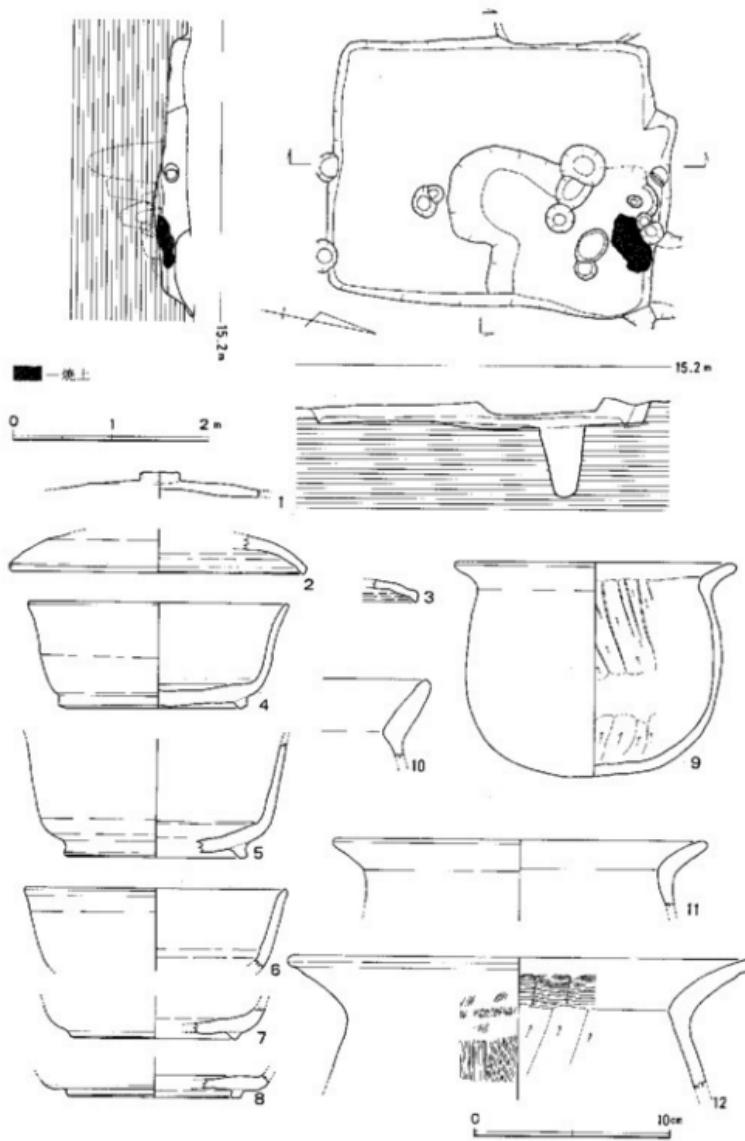


Fig. 25 8号竪穴住居跡実測図 (1/60)、遺物実測図 (1/3)

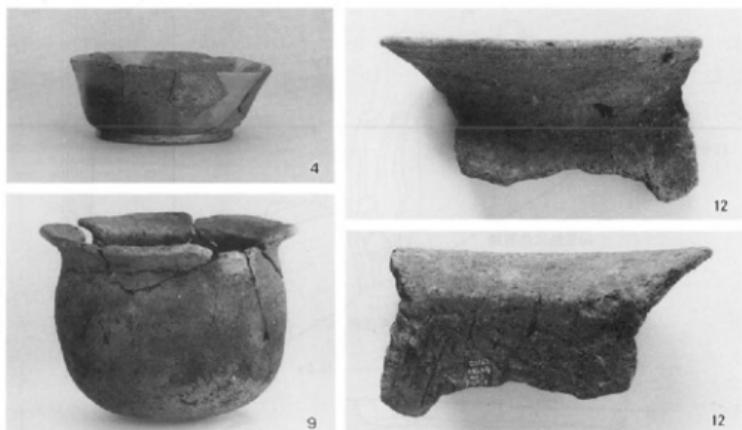


Fig. 26 8号竪穴住居跡出土遺物

縁部は横ナデする。12は、口縁部内面の下半に横刷毛目調整をのこしている。

9号竪穴住居跡 (Fig. 27~29・31)

調査区東辺より検出された竪穴住居跡で、10号住居跡に切られる。また、大半は調査区外に出ており、平面的な規模は不明である。床面までの深さは、24cm前後をはかる。壁際の床面には、深さ5cm前後の壁溝が巡る。

出土遺物は、須恵器壺、土師器壺である。Fig. 31-1は須恵器の壺で、断面台形の低平な高台が付く。2・3は、土師器の壺である。頭部はすぼまらず、内湾しつつ開く体部を持つ。

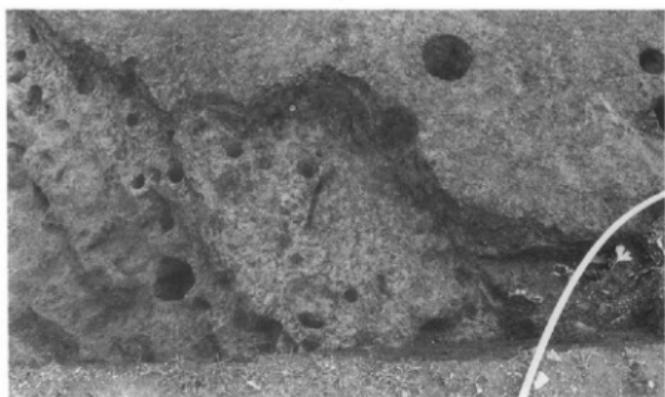


Fig. 27 9号竪穴住居跡 (南東より)

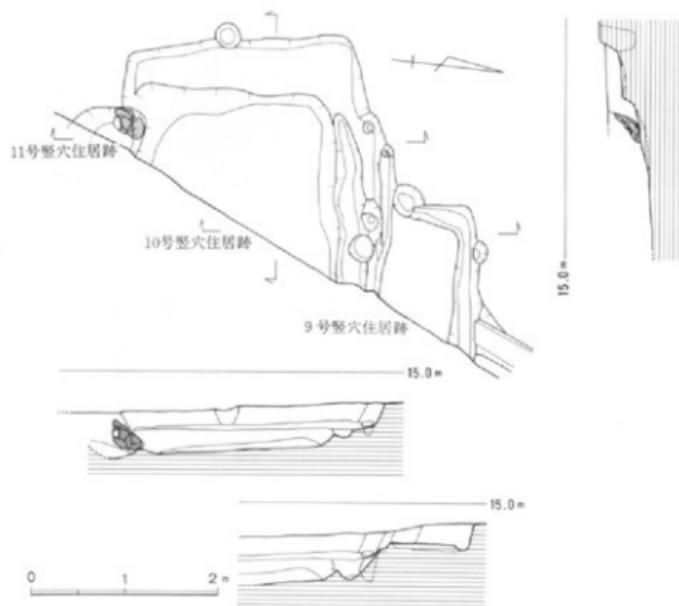


Fig. 28 9~11号竪穴住居跡実測図 (1/60)

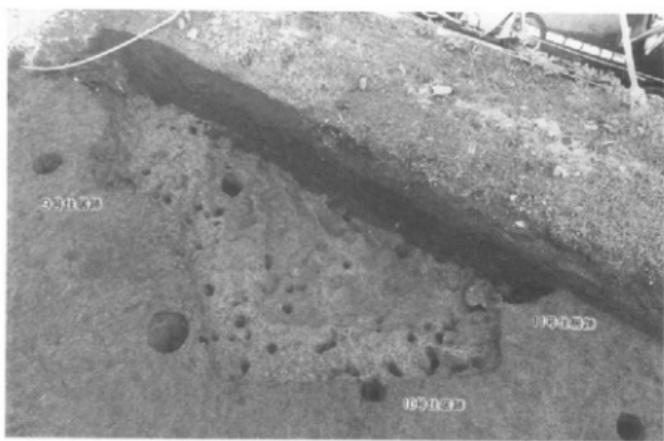


Fig. 29 9~11号竪穴住居跡 (西より)

10号竪穴住居跡 (Fig. 28・29・31)

9号竪穴住居跡と、11号竪穴住居跡を切る。短辺2.4m、長辺2.8m以上の長方形を呈する。

北壁では、小さな張出が上下2段作られていて、床面は約24cmの段差をなして、2段に掘る。したがって、西と北に小さなベッドを設けた形となる。

出土遺物は、須恵器壺・壺蓋・壺片・甕片・土師器壺・甕である。Fig. 31-4は、黒曜石剥片である。5~8は須恵器である。5は壺蓋、6~8は高台付壺である。6の高台は、

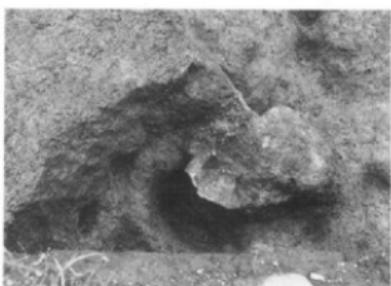


Fig. 30 11号竪穴住居跡土器甕出土状況



Fig. 31 9~11号竪穴住居跡遺物実測図 (1/3, 4~1/2)

壺部の底径に対して小さく、かなり内側に付けられている。9・10は、土師器の壺である。口縁部の内外面は、横ナデ調整する。

11号竪穴住居跡 (Fig. 28~31)

10号竪穴住居跡に切られ、大部分が調査区外に出るので、一部を検出したにとどまる。埋土および土層観察からは、この切り合い関係は判断できかねたが、11号住居跡の竈のものとみられる白色粘土が、10号住居跡との境界付近で途切れている点から、10号住居跡によって破壊されたものと考えた。

Fig. 31に図示した2点が出土した。11は須恵器の壺蓋、12は、土師器の壺である。竈の白色粘土に貼り付いて出土した。

12号竪穴住居跡 (Fig. 32・33)

調査区の中央付近で検出した竪穴住居跡である。6号竪穴住居跡に切られ、北辺を失う。2.7×2.1m以上の方形もしくは長方形を呈し、深さ18cm前後をはかる。東壁の南よりに、竈がつくられている。焚口を浅

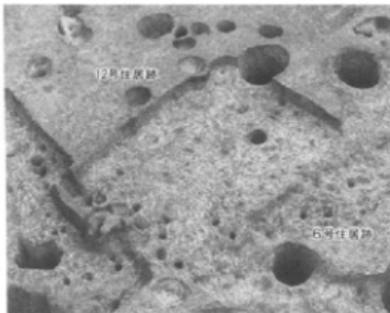


Fig. 32 12号竪穴住居跡（北より）

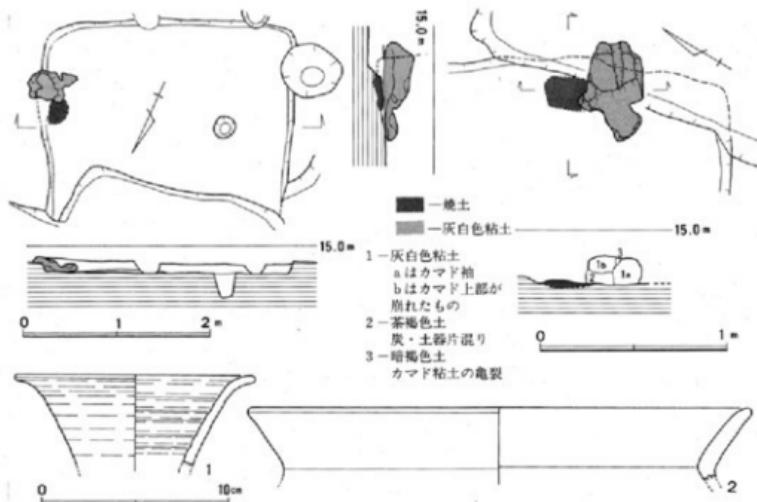


Fig. 33 12号竪穴住居跡実測図 (1/60), 遺物実測図 (1/3)

く掘りくぼめ、左右に粘土で袖を作ったものだが、左袖は残っていなかった。右袖も依存状態は悪く、一部分が、しかも上部が下に折れ曲がった形で検出されたにすぎない。焚口は、加熱で赤変していた。煙道は、8号住居跡の埋土に掘り込まれていた為、検出できなかった。床面は、ほぼ平坦である。主柱穴はみとめられない。

須恵器片、土師器片が出土した。Fig. 33-1は、須恵器の壺の口縁である。内外面とも、横ナデ調整する。2は、土師器の壺である。体部内面は削り、口縁部は横ナデする。

13号竪穴住居跡 (Fig. 34~38)

調査区西辺で検出したもので、西側の一部が調査区外に出る。3×3.2mの長方形を呈し、深さ約45cmをかる。東壁の南隅に竈を設ける。焚口を浅く掘りくぼめ、壁面には斜めに煙道を掘っている。両袖の粘土による張り出しは、みられなかった。しかし、竈上をおおうように多量の白色粘土が出土しており (Fig. 35-(1))、住居を廃絶した段階で袖を崩したものと考えられる。

焚口内には焼土ブロックがみられ、火熱で赤変した箇所も確認できた。なお、竈に接した南側にも、火熱で赤変した部分と煙道とみられる溝状の掘り込みがあり、ここにも竈が作られていたものと思われる。壁際に巡らされた壁溝が、東壁の竈近くで途切れている点からみて、東壁の竈が13号住居跡当初のものであることは明らかで、南側の竈は、13号住居跡に切られた、15号竪穴住居跡に伴うものであろう。

出土遺物は、須恵器壺・壺蓋・甕、土師器壺・壺蓋・甕である。Fig. 38-1~12は、須恵器である。1・2は蓋で、住居跡床面から出土した。1は、竈付近の白色粘土の下から出土



Fig. 34 13号竪穴住居跡（北東より）

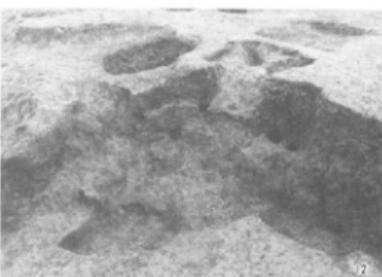
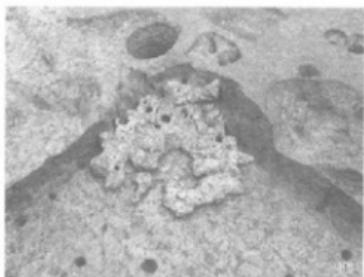


Fig. 35 13号竪穴住居跡・竈 (1)…粘土出土検出状況 (2)…粘土除去状況

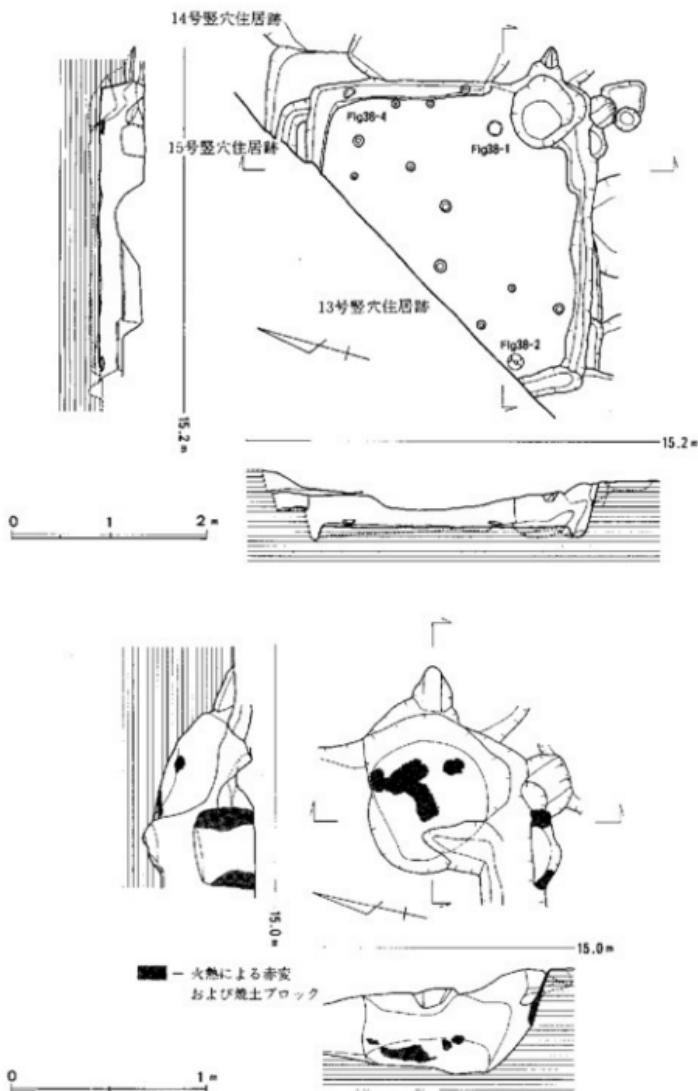


Fig. 36 13号竪穴住居跡実測図 (1/60) 察実測図 (1/30)

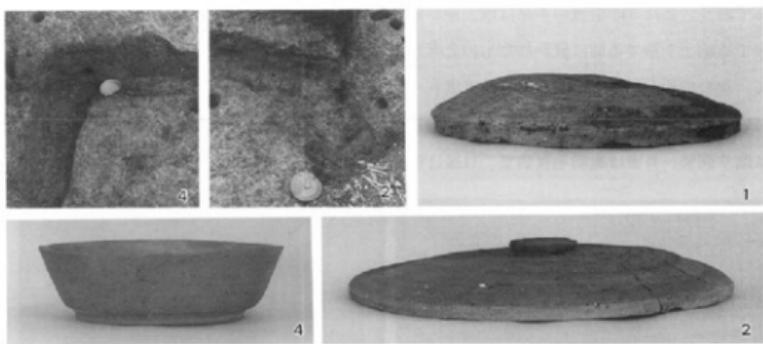


Fig. 37 13号竪穴住居跡遺物出土状況・出土遺物

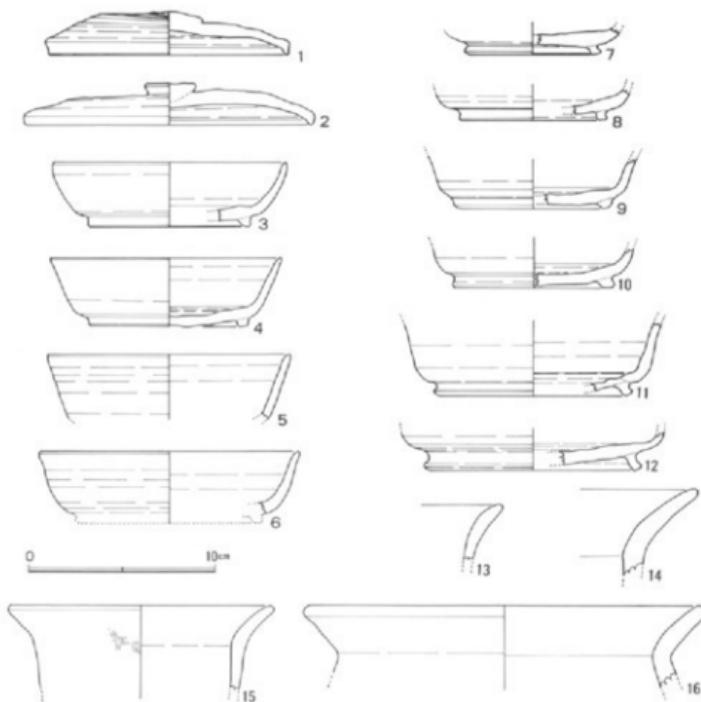


Fig. 38 13号竪穴住居跡遺物実測図 (1 / 3)

しており、またこの位置が本来は竈左袖が設けられた箇所と推定されるところから、住居廃絶後で竈粘土を捨てる前に置かれたものと考えられる。3~12は、高台付壺である。口径に対して、比較的器高が低い。なお、4は壁溝状の床面と同一レベルから出土した。住居跡が使われていた時点での、壁溝が埋められたことを示している。13~16は、土師器の甕である。体部内面は削り調整、外面は板刷毛目調整、口縁は横ナデ調整する。

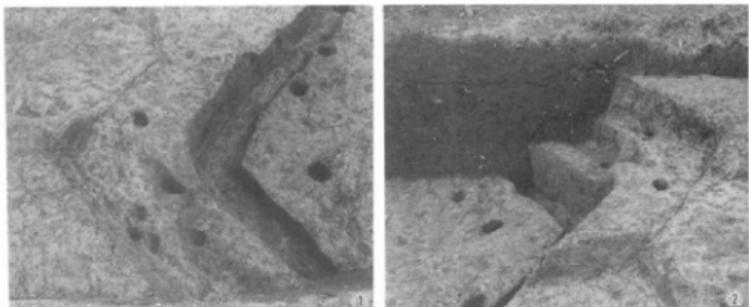


Fig. 39 14号・15号竪穴住居跡 (1)…北西より (2)…土層断面

14号竪穴住居跡 (Fig. 36・39)

13号竪穴住居跡に切られた竪穴住居跡で、一部が検出されたにとどまる。床面は、踏み締められており、東側の搅乱部分に露出した地山粘土との区別は、容易であった。

15号竪穴住居跡 (Fig. 36・39)

13号竪穴住居跡・14号竪穴住居跡に切られている。壁際には、深さ2.5~4cmで壁溝が掘られている。

16号竪穴住居跡 (Fig. 40)

13号竪穴住居跡に切られた、方形竪穴住居跡である。7号土塙とも重複するが、埋土が類似し、土層断面を見ても両者の切り合ひ関係は、区別できなかった。

須恵器小片、土師器甕小片が出土した。

17号竪穴住居跡 (Fig. 8)

調査区南辺で、北東隅を検出したものである。深さは、約10cmをはかる。

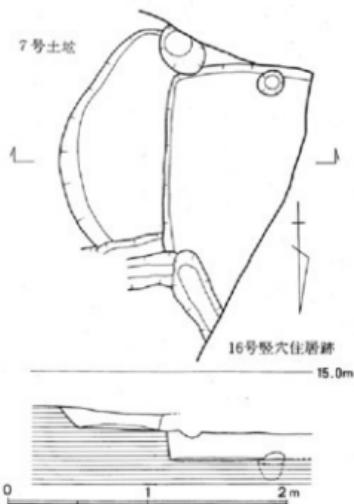


Fig. 40 16号竪穴住居跡・7号土塙実測図 (1/40)

(2) 土塙

1号土塙 (Fig. 41)

調査区北辺で検出した土塙である。調査区外までのびるため、規模は不明。検出した部分で長軸2.2m以上、幅1.6m、深さ5～6cmをはかる。

土師器の壊破片が出土した。

2号土塙 (土塙墓、Fig. 42～44)

2号堅穴住居跡を切り込んで検出された土塙で、南側を攪乱のため失う。副葬品と判断される青磁皿が出土しており、また鉄釘の出土がない点から、土塙墓と判断される。推定長軸165cm、短軸93cmの小判形平面を呈し、深さ15cm前後が残っていた。

Fig. 42は、副葬されていた青磁皿である。土色をおびた灰色の胎土に、淡灰緑色の透明釉を施す。外底部は、

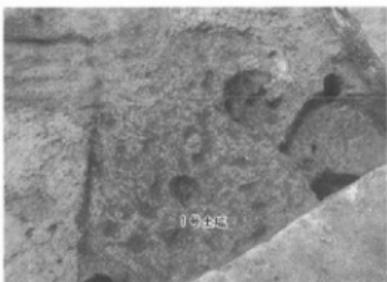


Fig. 41 1号土塙 (北東より)

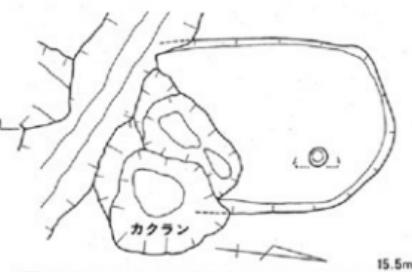


Fig. 42 2号土塙遺物実測図 (1/3)

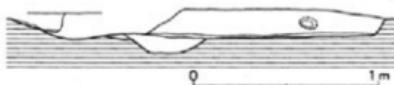


Fig. 43 2号土塙実測図 (1/30)



Fig. 44 2号土塙・青磁皿 (1)…東から (2)…青磁皿見込 (3)…同底部

露胎とする。施文はない。同安窯系青磁である。

3号土塙 (Fig. 45・46)

調査区東辺近くで検出された、いわゆる焼土塙である。同壁の上半が火熱により、硬化・赤変している。90×70cmの隅丸長方形を呈し、深さは約20cmをはかる。

埋土下位には、炭粒を含んだ焼土が堆積しており (Fig. 46-(1))、この面で火を焚いたものと思われる。用途は、不明。

須恵器小片が出土したのみである。

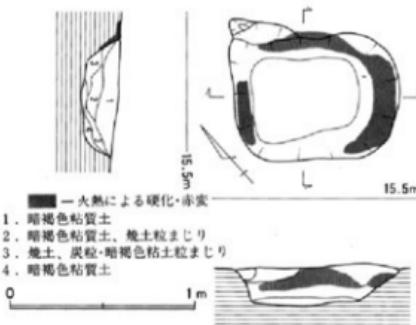


Fig. 45 3号土塙実測図 (1/30)

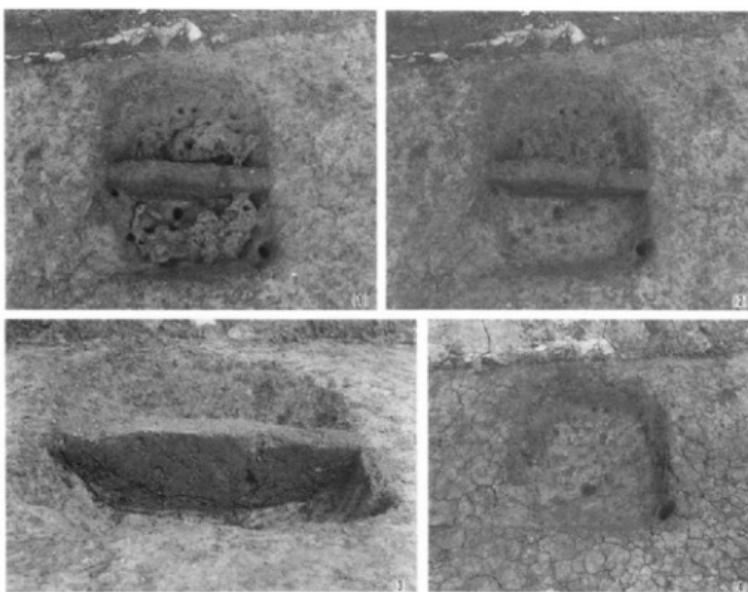


Fig. 46 3号土塙 (1)…焼土検出状況 (2)…焼土除去状況 (3)…土層断面 (4)…完掘状況

4号土塙 (Fig. 16)

4号堅穴住居跡、5号堅穴住居跡に切り込んで掘られた土塙である。直径約1mの不整形を呈し、遺構検出面からの深さは、約33cmをはかる。

出土遺物は、須恵器破片・土師器破片である。

5号土塙 (Fig. 47)

調査区中央付近で検出した土塙である。東壁の一部を、攪乱孔に切られて失っている。直径約1.6mの略円形を呈し、深さ約18cmをはかる。土塙床面で2基の柱穴を検出したが、5号土塙に伴うものではなかろう。ただし、5号土塙と柱穴との前後関係は、判断できなかつた。

出土遺物は、須恵器环・环蓋・臺・甕、土師器环蓋・甕・壺片である。Fig. 47-1～6は、須恵器の高台付环である。1を除いて、口径に対し器高が低いという特徴を持つ。高台は、体部と底部との境から内側にはいって、貼り付けられている。10は、須恵器の甕である。頭部付近の破片である。暗灰色の緻密な胎土で、焼成も良好であるが、器表は前面にわたって細かい球状に剥離し、調整痕をとどめていない。7～9は、土師器の甕である。いずれも器壁が荒れ、調整はうかがえない。

6号土塙 (Fig. 48・49)

調査区が東に張り出した2区の北辺で検出した土塙である。平面形態は、長辺約1.8m、短辺約1.2mの長方形を呈し、検出面からの深さは48～60cmをはかる。壁面は、胴張り氣味に立ち上がる。床面は、若干東に向かって傾斜するが、ほぼ平坦である。床面上で、小口側壁際からそれぞれ2個ずつの小ピットが検出された。小ピットは、約50cmの間隔をあけて並んでおり、小

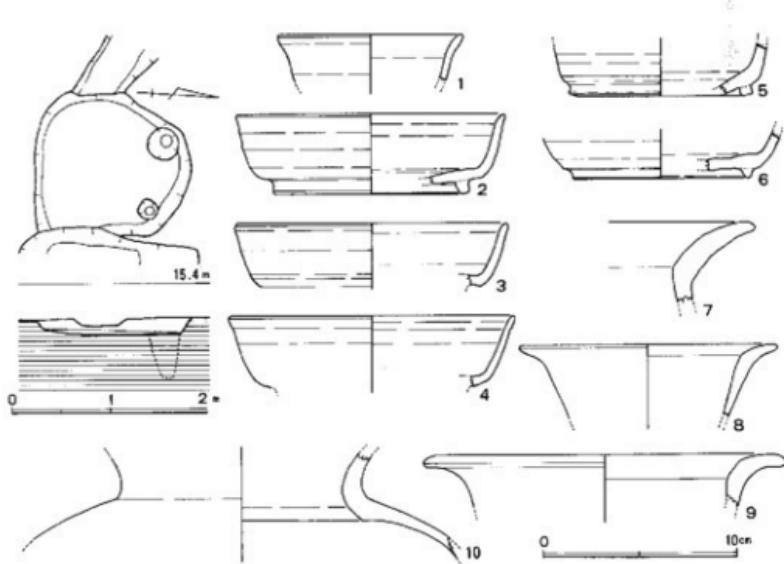


Fig. 47 5号土塙実測図 (1/60), 遺物実測図 (1/3)

口の壁からは2~4cm離れている。柱穴とするにはピットの径が小さく、径10cm前後の杭を立てたものと考えられる。壁材を押さえたものともみられるが、杭材の径が太いこと、その配置に規則性が認められる点から、何らかの簡単な上部構造（例えば蓋）を支えたものと思われる。地下貯蔵穴に類したものであろう。

出土遺物は、土師器・龍泉窯系青磁・黄釉陶器片・砥石片・滑石片の他、鉄釘が3本出土している。

7号土塙 (Fig. 40)

調査区南西角から、16号竪穴住居跡と重複して検出された。前述した様に、16号住居跡との前後関係は、明らかでない。

須恵器甕片・土師器小片が出土した。

8号土塙 (Fig. 8)

調査区南辺の中程で検出した土塙である。大部分が調査区外にあり、形状は不明。壁はほぼ垂直に立ち、検出面からの深さは、100cmをこえる。調査できた部分がわずかの為、床面まで掘り下げていない。

遺物の出土は、なかった。

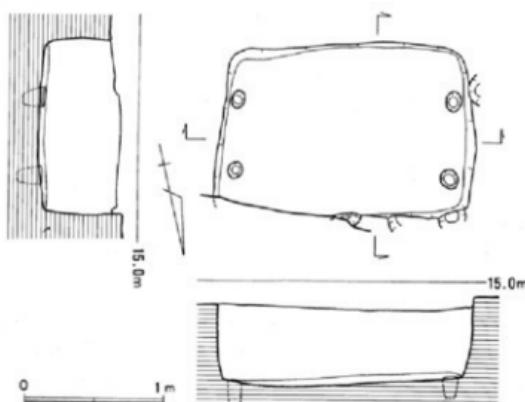


Fig. 48 6号土塙実測図 (1/40)



Fig. 46 6号土塙

(1)…全景 (北東より) (2)…埋積状況 (南西より)

(3) 挖立柱建物跡

発掘調査時に1号掘立柱建物跡、その後の資料操作で2号～4号掘立柱建物跡を復原した。

1号掘立柱建物跡 (Fig. 50・51)

梁間1間、桁行2間以上を検出した。梁間の柱間寸法は110～130cm、桁行の柱間寸法は、260～290cmと、細長い建物で、廊などを想定するのが妥当であろう。柱穴は深く、検出面からの深さ85～120cmをはかる。桁行は、磁北から約21度東偏する。

2号掘立柱建物跡 (Fig. 51)

梁間1間（柱間約260cm）、桁行2間以上（柱間推定約180cm）で、西の妻側に約115cmの庇がつく。桁行は、磁北から69度西偏する。

3号掘立柱建物跡 (Fig. 52)

梁間1間、桁行2間の建物跡であるが、東側にのびて2間×2間以上の建物となる可能性も考えられる。1×2間とすると、梁間柱間寸法258cm、桁行柱間寸法180～192cmをはかる。桁行は、ほぼ磁北を指す。

4号掘立柱建物跡 (Fig. 52)

1間以上×2間以上の建物である。大半が調査区外に出るため、規模は推定できない。主軸方位は、磁北から5.5度西偏し、ほぼ真北を指すものと言えよう。

これらの建物跡の柱穴からは、時期を決定するに足る程の遺物は、出土しなかった。



Fig. 50 1号掘立柱建物跡（北西より）

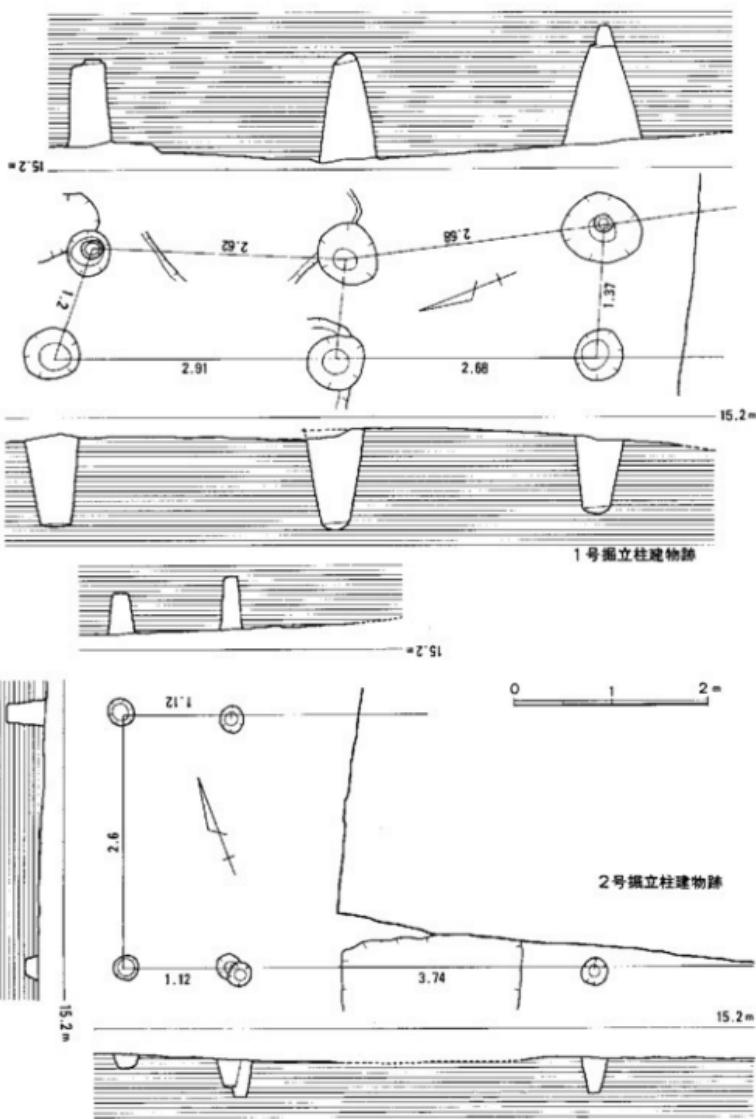


Fig. 51 据立柱建物跡実測図 1 (1 / 60)

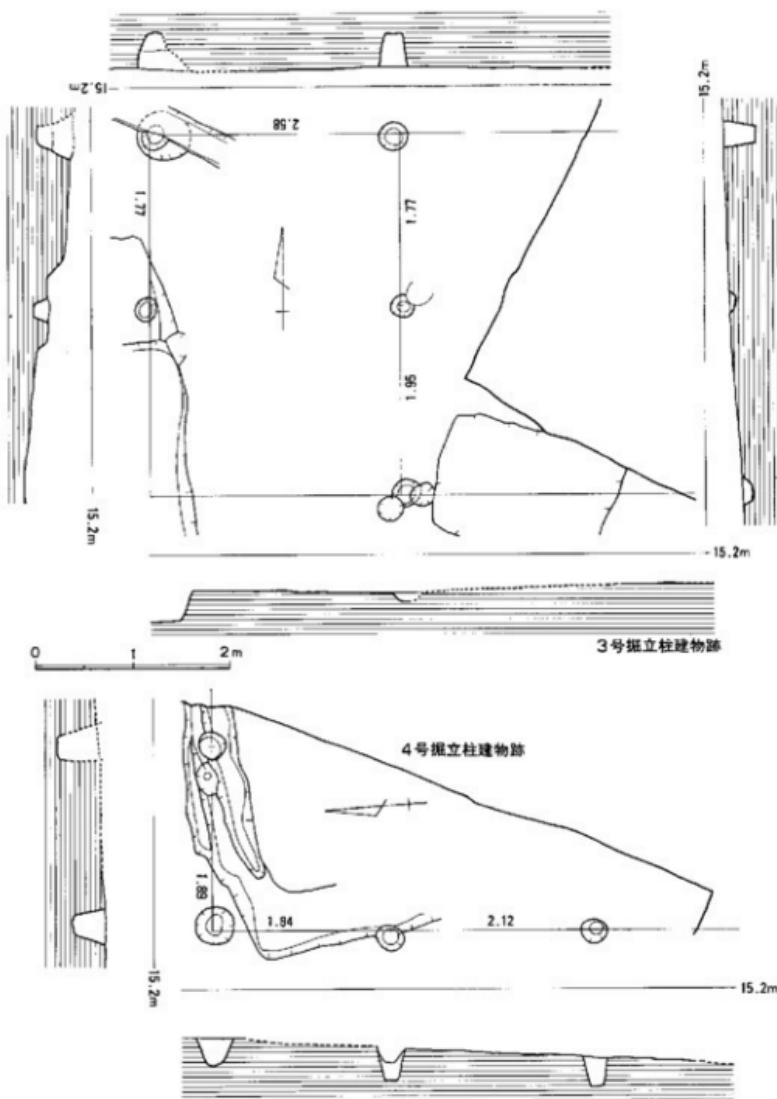


Fig. 52 据立柱建物跡実測図 2 (1 / 60)

第三章 まとめ

麦野A遺跡群第4次調査では、奈良時代と中世前半の集落跡が検出された。報告書の末尾にあたって、それぞれの遺構について、若干の考察を加えたい。

(1) 奈良時代の集落

竪穴住居跡とゴミ穴と思われる土塙を検出した。竪穴住居跡は、いずれも軸方向をほぼ東西に向けてつくられている。住居跡は、分布状況から6群にわけられる。第1群は1～3号住居跡、第2群は4・5号住居跡、竪穴住居状遺構、第3群は9～11号住居跡、第4群は6～8・12号住居跡、第5群は13～16号住居跡、第6群は17号住居跡である。各群を構成する住居跡は、すべて重複し、各群内での建て替えの結果と考えられる。したがって、群の分布は、そのまま当集落における一時点での住居の構成を示すものと言える。

次に、各遺構の時間的な位置付けについて触れたい。時期比定は、『牛頭窓跡群II』(福岡県文化財調査報告書第89集、福岡県教育委員会、1989年)において川述昭人氏・森田勉氏によつて示された編年・年代観に依拠した。7世紀後半に比定できるのは、第2群の竪穴住居状遺構のみである。8世紀前半にあてられるのは、2号住居跡(第1群)、9号住居跡(第3群)、7号住居跡(第4群)である。8世紀中頃の遺構が最も多く、4・5号住居跡(第2群)、10・11号住居跡(第3群)、13号住居跡(第5群)、5号土塙がこの時期に属す。8世紀後半から9世紀初では、3号住居跡(第1群)、6・8・12号住居跡(第4群)である。なお、遺物からは時期比定が出来なかった1号住居跡(第1群)は、切り合ひ関係から8世紀前半以前、14～16号住居跡は同様に8世紀中頃以前におかれる。

以上の点から、当集落は7世紀後半から9世紀初にかけて継続して営まれた集落で、8世紀中頃に盛期を迎えたものと考えられる。

(2) 中世前半の集落

掘立柱建物跡、土塙、土塙墓で構成される。本調査区内では、井戸は検出されていない。柱穴出土遺物で、時期を比定できるものはなく、土塙の時期を以って集落の時期にあてたい。

2号土塙は、同安窓系青磁皿を副葬する土塙墓で、12世紀後半から13世紀初におかれよう。6号土塙からも輸入陶磁器片が出土しており、やはり12世紀後半頃にあてられる。本調査全体を通じて、13世紀以降に属する遺物は、搅乱に含まれた現代の遺物を除けば皆無である。これらの点から、12世紀後半から13世紀初を集落の時期として考えたい。

麦野A遺跡群の調査は、僅か3地点にすぎない。これらの地点は、それぞれ時期を異にしており、麦野A遺跡群を含む麦野丘陵の歴史の解明は、今後の調査に期するところ大である。

麦野 A

—麦野A遺跡群第4次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第275集

1992年3月13日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 麗和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1-15-1
